

戦前の民間ホール主導による子供の趣味教育とネットワーク

－ホールの社会的存在意義の自覚と社会へのアプローチ－

The Children's Arts Education and its Network Made by the Program of Private Hall in Prewar Japan

－The Recognition of the Value of the Hall and the Approach to the Society－

山本 美紀

Miki YAMAMOTO

Abstract

The Asahi-Kaikan that opened on 9th October 1929 at Nakanoshima, Osaka, had children's educational programs from the beginning. There were two stages: one is the actual stage of the Asahi-Kaikan, and the other is the Journal "Asahi-Kaikan-Kodomono-Hon". The actual stage was made up of Asahi Children's Meetings and Asahi Children's Athene. This paper will describe and discuss the process of building the network of the newspaper subscribers, focusing on the children and their families, as the children's programs were considered to be strongly related to the value and corporate identity of the Asahi-Kaikan. The styles of those children's programs connected each generation because they approached not only children but also their families for the purpose of realizing the corporate social identity of the Asahi-Kaikan, that is education and welfare.

The idea of the organization's activities started from recognizing the special responsibility of a newspaper company for the society. That time was characterized by many miserable news reports about World War I, or the Great Kanto Earthquake. Those news reports attracted people's interest and brought a direct increase in profit of to the newspaper company. The network was constructed by the paper's subscribers and then expanded to the children's families later.

The networking process, with the Asahi Kaikan at the center, ultimately led to the cultural movement after World War II, realizing the popularization of arts, which was embodied in the forms of Ro-On 労音 or Uta-Goe 歌声 in Japan. So, the Asahi-Kaikan's educational programs and its networks could be aptly summed up as the experimentation of social education and cultural activities incorporated in the social welfare system.

キーワード：(ホール) (朝日会館) (マスメディア) (芸術教育プログラム) (社会福祉)

I. はじめに：朝日会館の概要説明

朝日会館は、1926年（大正15年）10月9日、大阪朝日新聞創刊50周年の記念事業として、大阪中之島（大阪本社
の隣接地）にオープンした。1600席を有する当時としては最大規模のホールである（十河1953：35）。会館の運営は

社団法人朝日新聞社会事業団（前島2016：237）¹⁾（後の財団法人朝日新聞厚生文化事業団，以下社会事業団）が担った。朝日会館では初期より子供のための企画枠があり、具体的な「現場」としては、「アサヒ・コドモの会」（以下「コドモの会」）と、「アサヒ・コドモ・芸術院（アテネ）」（以下「コドモ・アテネ」）があり、『アサヒ・コドモの本』は機関誌として、それらの場をつなぎ、さらなるネットワーク形成に貢献していた。

本稿では、この朝日会館を中心としたごく初期のネットワークの構築がなされていく過程をたどることにより、その過程がホールの存在の根幹、つまり「存在意義」にどのような影響を与え、具体的に運営に反映されていったのかについて、特に「コドモ」対象の事業を中心として、「ネットワーク形成」の視点から考察する。なぜなら、朝日会館の「コドモ」を対象企画は、家庭に介入し、各世代に広く関わるものとなっており、それが運営団体の「目的」と「自己認識」に最も強く関わっていたと考えられるからだ。

今とは違う時代のことであり、一見、現代の劇場運営には全く関係の無いことのように思えるが、ネットワーク形成に着目することにより、ホールの存在意義の重要性が浮かび上がり、ホールの社会包摂機能が注目される現代に、それをとらえ直すきっかけを提供すると考えられるのである。

II. 朝日新聞社の文化事業におけるネットワーク作り（1923(T12)年－1935(S10)年；社団法人朝日新聞社会事業団時代を中心として）

i. 「アサヒカイクン・コドモの会」『コドモの本』にいたるまで（1923(T12)年－1926(T15)年）

「朝日会館」がオープンとほぼ同時に、コドモ対象企画がスタートした。第1弾は、10月23日「少年少女映画『二つの玉』の会」²⁾だが、これは「いきなり」始まったというわけではない。それ以前から、朝日新聞ではコドモを視野に入れた仕事が「雑誌」において始まっており、それが伏線となっていた。つまり、朝日会館の「コドモ」対象企画は、「雑誌」から出発し、朝日会館という「現実の場の獲得」により、活動が仮想から現実空間に移され、豊かな発想の蓄積に裏打ちされた大胆な展開を迎えたと言える。

子供文化とメディアとの関わりにおいて、特に童話の観点から研究した畠山によると、日本初の幼児向けカラー絵雑誌『お伽絵こども』の絵を担当した辻村又男（画名：辻村秋峯）が、1904年に朝日新聞社に入社し、「大阪朝日新聞社には幼児向け絵雑誌を発行する人的素地があった」とする（畠山1996：272）。同社は、『週刊朝日』の「コドモページ」を発展させ、1923(T12)年12月1日、『コドモアサヒ』を創刊した。これには、辻村ほか3人の学芸部員が関わっていた（畠山1996：273）。

『コドモアサヒ』の編集については、「一 色彩とコドモの心理関係、二 徒に感傷的に流れぬこと、三 奔放な想像力の善導、四 音楽の味を豊かに盛ること、五 健やかさと純情を培ふこと」が留意点としてあげられていたという（畠山1996：274）。これは、朝日会館のコドモ対象企画の指向性と共通しており、また朝日会館オープン後の『アサヒカイクン・コドモの本』の編集内容とも共通点が認められ、それらを取った形で示したものと考えられる。ちなみに、『コドモアサヒ』と『コドモの本』は住み分けされており、それぞれ「『コドモアサヒ』が年少用の絵雑誌だったのに対して、こちら〔『コドモの本』〕は小学生を対象」となっていた（畠山1996：287）。

また、雑誌『コドモアサヒ』の具体的な活動としては、「コドモアサヒ誕生記念」として「坪内逍遙博士指導 家庭用児童劇模範講演会」が同年1923(T12)年11月30日－12月9日にかけて開催された。子供のための児

¹⁾ 1926年10月～1928年1月までは、朝日会館臨時役員会が運営を担当。

²⁾ 「催し物一覧」『会館芸術 朝日会館五週年記念号 昭和六年道場週刊号』第4号，所収【59-116】1931年12月，参照。

童演劇と、坪内逍遙による保護者向け講演「復興的芸術の一主要素としての児童劇」による構成だったようである（畠山1996：274）。この発刊記念行事は大阪、京都、神戸、名古屋で行われたことが記録に残っており、この点も、後の「アサヒ・コドモの会」の活動が、朝日会館を中心にこの地域で展開されたこと的前提だと考えられる。なお、「アサヒコドモ会」は大阪高島屋で、1924(T13)年2月1日から24日にかけて「コドモアサヒ」後援のもと開催された「御成婚記念コドモ会」以来のもので、1932(S7)年に「アサヒ・コドモの会」になるまでこの名称が引き継がれていく。

このように、朝日会館が始まる以前から、コドモに関わっていくときの立ち位置・姿勢、方向性が、ある程度実践的（実験的に）に固まっていき、実際の場を得た後も一貫して運営に影響を与えていたということがうかがえる。

ii. 「朝日会館」の開館と「朝日新聞社会事業団」の成立後（1926(T15)年－1936(S11)年）

そのようにして時代の空気が動く中、先述したように1926年（大正15年）10月朝日会館が「満を持して」オープンした。第4代館長の十河巖³⁾は朝日会館を「文化芸術の新しい殿堂として朝日新聞が大阪市民に贈るもの」（十河1976：2）という言い方をする。なぜなら、「朝日会館設立の主旨は、朝日新聞が社会、文化事業を行つて社の利益の一部を社会に還元しよう」（十河1976：12）というものであったからだ。

朝日会館のオープン後2年して、1928年（昭和3年）1月25日、社団法人朝日新聞社会事業団⁴⁾（後の財団法人朝日新聞厚生文化事業団、以下社会事業団）が成立。以降、社会事業団が財団法人朝日新聞厚生文化事業団に発展的に解消されるまで、実質的運営を担った⁵⁾。この社会事業団は、申請当初「社団法人朝日会館」として申請されていたが、おそらく、朝日新聞社によるより広い社会福祉的活動を射程に収めるために申請途中

に名称変更がなされたと考えられる。というのも、社会事業団の活動については、「その純益金をふやすため、丹波秀伯の斡旋で時の大蔵次官通達が発せられて、〔社会福祉事業に回すという条件で〕朝日会館で演じる音楽、劇等の入場税は免税」（十河1976：12）という特別優遇措置がとられており、「朝日会館」と直接的な場を限定するものの、より助成を正当化するために、「朝日新聞社全体の社会事業の一部としての朝日会館運営」という点を強調する必要があったのではないかと考えられるためである。

そこで、ここからは社会事業団の年次の「事業報告」「決算報告」から朝日会館のコドモ関係事業に関する

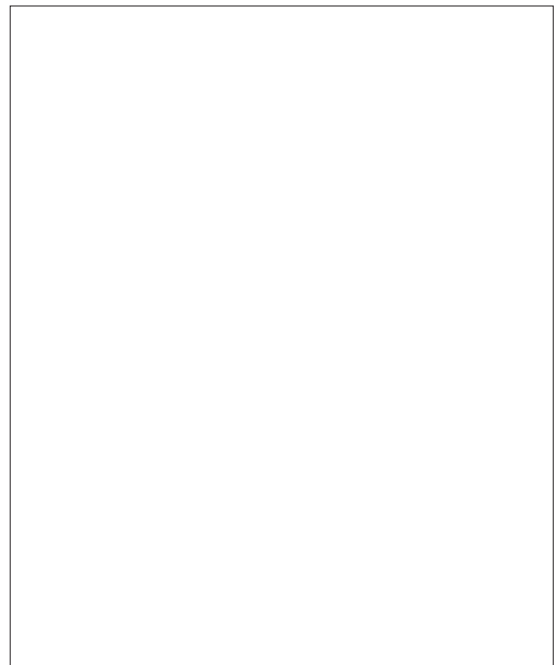


図1 『会館芸術』1940年2月から12月号の表紙に掲載された版画の朝日会館。装丁：田村孝之介

³⁾ 十河巖は第2次世界大戦終結の1年後にジャワ支局より戻り、1946年（昭和21年）1月から朝日会館の4代目館長となった人物。

⁴⁾ 1926年10月～1928年1月までは、朝日会館臨時役員会が運営を担当（前島志保2016：237）。

⁵⁾ 「社団法人朝日新聞社会事業団臨時社員総会会議事録」「社員総会決議録」1928年1月31日付

ものを拾いあげ、『コドモの本』に記載される内容等と照らしあわせて、朝日会館の実態をたどる。

尚、年次の活動の特性をわかりやすくするために、社会事業団の活動期を「初期」「確立期」「発展期」の3期に分け、さらにそれが社会事業団内の年次において第何期になるかを示している。

i) 初期：1928(S4)年01月－1931(S6)年04月まで【第1期～第4期】

この時期は初期の段階特有の、表記が変化していく時期である。途中1929年に「社団法人」が設立され、基盤が徐々に固まっていく。この時期の変化の特徴を、社会事業団の決算報告から読むと以下ようになる。

- ・公益事業費に、「教化事業費」「幼年保護事業費」の項目
- ・1928年「アサヒ・コドモ映画会」が1929年には「アサヒコドモ会」になる。
- ・1929年5月－1930年4月（第3期）から事業報告されるようになる。

ここでは、「アサヒ・コドモ会」が「諸種の文化事業」に分類されて、月例開催となったことが報告されている。また、同じ分類に、前年の1928年8月に発足した「アサヒコーラス」の組織化も改めて報告されている。

- ・1930年5月－1931年4月（第4期）から会館稼働業が事業報告に記載
- ・「アサヒコドモ会」の表記に「・」がついたりつかなかったりなど、一定せず、「アサヒコドモの会」という表記も見られ、内部でも名称の揺らぎが確認できる。

ii) 確立期：1931(S6)年05月－1934(S6)年04月まで【第5期～第7期】

事業報告が一新され、詳細な事業報告が為されると共に、大阪・京都・神戸の活動報告も、別々の欄を設けて記載されるようになる。

【第5期：1931年5月1日－1932年4月30日】

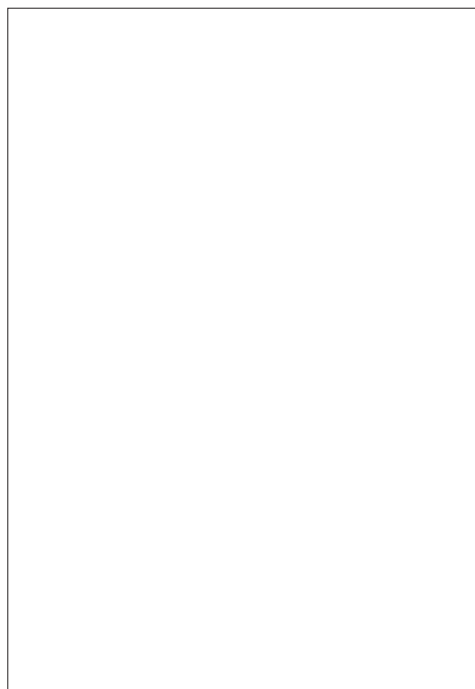


図2 『コドモの本』第4巻第10号1934年10月号, 24頁

この期の大きなものは2つあり、1つは1931年12月の『アサヒカイカン・コドモの本』（以下『コドモの本』）の創刊、もう一つは1932年2月の呼びかけから始まった「アサヒ・コドモ・アテネ」（以下「コドモ・アテネ」）のスタートである。事業報告には朝日会館への入場者数の激増を喜ぶ声があり、「定例の事業・催しもの」の項目に、成人対象の「アサヒ・コーラス団」（昭和2年8月創設；現団員数80名）、少年少女のための「アサヒ・コドモ・アテネ」（昭和7年2月創設；現団員数157名）、また「アサヒ・コドモの会」（以下「コドモの会」）の「の」入り名称が公式文書に定着し、月例開催の報告が上がっている。

このような状況から、「アサヒ・コドモ・アテネ」は、「アサヒ・コーラス」⁶⁾の発想から発展したものであることが推察される。さらに、「コドモの会」『コドモの本』「コドモ・アテネ」といったこれらの活動が、

ゆるやかな結びつきのもとに運営されていたこともここからうかがえる。

もっとも、その結びつきはゆるやかとはいえ、相互に影響しあい、相乗効果を上げていた。つまり、朝日会館における「コドモの会」の活動がまずあり、その内容を朝日会館外に伝えると同時に、会員同士をつなぐ手段として『コドモの本』があり、やがてできた芸術教育の場である「コドモ・アテネ」は、「コドモの会」でその成果を披露するようになった。このトライアングルは、「コドモ」をキーワードに、循環し、さらにメンバーを増やしていくシステムとなっていたのである。

次に、それぞれの活動内容を簡単に押さえておこう。

①「コドモの会」

（前身は「コドモ会」）は朝日会館オープン当初の1926年10月23日の「少年少女映画『二つの玉』⁷⁾の会」を皮切りに、終戦間際まで238回を数えた。前出の第4代館長十河の『朝日会館史』にある回想によると「毎回入場者1600名」とあるので、ほぼ毎回全席埋まる状況だったと考えられる（十河1976：229）。「コドモの会」の活動は、館内だけでなく、季節によっては「青空の下のアサヒ・コドモの会」（『アサヒカイカン・コドモの本』1935年9月号）なども開かれ、館外での活動も行う、非常に活発なネットワークを構成していった。このネットワークはその後、大阪だけでなく東京や京都・神戸・名古屋・横浜にも拡大していく。中でも東京は別格であったと考えられる。現時点で確認できるかぎりにおいて、1933年1月号より表紙に「アサヒ・コドモの会」（大阪）と並んで名称が確認でき、「朝日こどもの会」との名称で朝日講堂において自律した運営がされていたことがうかがえる。

②『コドモの本』

『コドモの本』は、1931年から出版され、このように活発な活動を行う各地の「コドモの会」を結ぶ共通機関誌であった。『コドモの本』発行に関する変遷について、十河巖は『朝日会館史（大阪朝日編年史別巻）』の中で、月刊機関誌「アサヒコドモの本」通巻一四〇八号（昭和十九年三月現在）で、大阪、京都、神戸の三都市の「アサヒコドモの会」ならびに横浜「アサヒコドモの会」の四都市の共通機関誌として発行していたとする（十河1976：229）。十河は「通巻一四〇八号」と驚異的な数字をあげるが、現在確認できるのは39巻のみである。それでも、現存する『コドモの本』からは、実に幅広いジャンルが取り上げられていたことが確認できる。

例えば、外国人の子供の写真が表紙を飾る1932(S7)年3月号（第二巻第一号）は、ページ数が24頁あり、冒頭よりアサヒ・コドモ・アテネなどの様子を写した「アサヒ・コドモ・グラフ」、3月にちなんだ日本文化の説明が続き、公募作品による歌〈兵隊進め〉、童詩、童話、漫画、工作、対話（説話）、紀行文（ジャワの影絵芝居）、詩、つなぎ絵漫画（これは、現代では無い）、童話、公募した自由画の選評と自由画、大人に向けた「児童の絵画教育について」（日本造形美育研究所森下文一郎）と題したお

⁶⁾ 畠山は、1931年の重要な事業として、「アサヒ・コドモ・コーラス」の存在を上げる（畠山1996, 285）が、社会事業団の事業報告には、「アサヒ・コドモ・コーラス」を名称を上げて記載されていない。これは、「コドモ・アテネ」に先立ち、「コーラス」がまず試験的に始められたと考える方が妥当だろう。

⁷⁾ 二つの玉 1926（大正15）年11月11日 松竹（蒲田）《現代劇》 監督：葛見丈夫 原作：牧野大誓 脚本：吉田百助 撮影：野村昶 無性版 長さ：9巻 封切：大阪松竹座出演：水谷八重子、磯野秋雄、雲井鶴子、秋田伸一、小川国松、武田春郎。

* 「朝日新聞」連載の少年少女小説の映画化。水谷八重子の帰朝第1回主演作品（朱通祥男2008, 1051）

すすめ文、工作遊戯（作って遊ぶ）、子供の科学（軍事にまつわる）、コドモの新聞、コドモの映画、コドモの会館だより（アサヒ・コドモの会をはじめとしたことも対象事業の活動広報）、コドモ・レコード、綴方と綴方選評、童詩選評、次号の予告と作品募集要項、…というラインナップだった。

3つの現場をつなぐ機関誌として特筆すべきこととしては、むしろ、読んだり創作して懸賞応募できるコーナーを作ったりといった、家で楽しむ内容が充実していることである。これは、ホールでの活動が形を変えて家に持ち込まれるものであり、「アウトリーチ型活動」の一つとも言えよう。

③コドモ・アテネ

「コドモ・アテネ」は、「コドモの会」の活動を下地に創設された、ホールの活動が主導するこどものための芸術教育事業である⁸⁾。

『コドモの本』1932年（昭和7年）3月号には、コドモ・アテネが「長い歴史と多大の実績を挙げているアサヒ・コドモの事業の一部門」であり、「児童の文化運動に資して、芸術的陶冶と正しき成長を期して、まづ着手の第一に」創設されたことが宣言されている。

スタート時には「(1) 声楽、(2) 器楽、(3) リトミックの基本と応用」とあり、声楽とリトミックの基本は全員に課せられるというものであった。⁹⁾

確認される限りで、1934年3月からは音楽部の他に絵画部が設けられたり、音楽部の中に児童舞踊科が含まれたりなど、朝日会館での子供（見方によっては、大人）を対象とした企画に呼応して、多様な展開を見せる。講師陣の顧問には山田耕筈¹⁰⁾ や石井漠¹¹⁾ なども名を連ね、「コドモの会」での大々的な発表の機会を持つ、ホールを中心とした子供のための文化的ネットワークを有する事業へ成長していくのである。

【第6期：1932年5月1日－1933年4月30日】

「一般大衆に西洋音楽の鑑賞知識を普及するため」として、山田耕筈による「音楽大衆講座」が新たに開設され、さらに「朝日会館友の会」（以下「友の会」）が創設（会員1600名）されたことが、「定例の事業・催し物」に加えられる。また「本邦古典芸術女流郎瑠璃を保存鑑賞のため」として、竹本三蝶を

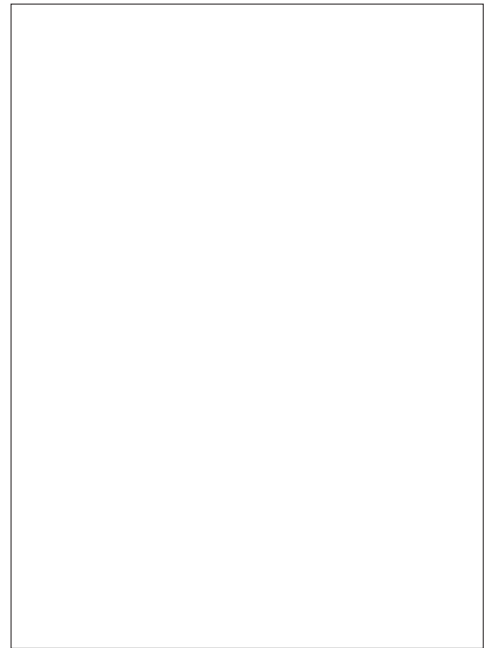


図3 『コドモの本』第3巻1号1933年1月号、表紙

⁸⁾ 大阪朝日新聞社・朝日会館内 アサヒ・コドモの会発行『アサヒカイカン・コドモの本』第2巻第1号、1932年3月、20頁、広告頁。

⁹⁾ 高尾亮雄「唯一のコドモ藝術の殿堂を守れ」『会館芸術』1931年5月号9頁

¹⁰⁾ 顧問としての山田耕筈の名前の初出は、『コドモの本』1934年3月号（Vol4 No3）。また、このとき「絵画部」の記載も初出として確認できる。

¹¹⁾ 顧問としての石井漠の名前の初出は、『コドモの本』1935年9月（Vol5 No9）。

まとめ役に「女流人形浄瑠璃」が定例会に組み入れた。

「児童に対する諸事情」の項目においては、「コドモの会」が平均1600名（ほぼ満席）を数え、さらに「コドモの会」に加えて8回目となった「青空の下のコドモの会」¹²⁾が毎回700名の参加があると報告されている。また、「コドモ・アテネ」の参加者は270名の参加者が報告されている。発行された『コドモの本』の発行数は決算報告の収入から換算して、およそ1年間で2万冊超え程度であったと考えられる。

【第7期：1933年5月1日－1934年4月30日】

前年度に「定例」として開催、報告された事業が、引き続き開催され、決算報告からも、一定の認知を得て、会館の使用に際しては「申し込み多数のためやむを得ず謝絶せるものも相当の数にのぼっている」¹³⁾と、うれしい悲鳴が聞こえてくる。

「観客と会館との関係性を一層密接ならしめ、もつて会館事業の伸展を期し、延いては関西文化のため貢献せんとする目的のものに」¹⁴⁾昨年創設された「友の会」は、会員数を2000人に伸ばしている。

また『コドモの本』は通巻29号を数え（収入からの単純計算で45,000冊、月平均3,700冊程度販売か？）、「コドモ・アテネ」は音楽・絵画の4分科に舞踏を加えた5分科で展開する。安定の充実期を迎えたと言えるだろう。

図4 『コドモの本』第4巻3号1934年3月3号、広告ページ

iii) 発展期：1934(S6)年05月－1936(S11)年12月（解散）【第8期～第9期】

この時期には、特に「コドモの会」の拡大に伴い、各地のデータが別個に記載されるようになる。発展期を迎え、滑り出しの一定の目的を達成したと判断したためか、組織の再編成が模索されるようになっていく時期である。

「友の会」は、会員数を2570名に伸ばし、「コドモ・アテネ」は引き続き5分科で展開、会員数は450名となっている。

自主運営の確立が認められた結果、1936(S11)年12月19日、「財団法人大阪朝日新聞社会事業団」の設立認可を受けて、「社団法人朝日新聞社会事業団」は発展的に解消され、事業が引き継がれていくことになった。

¹²⁾ 1931年5月1日－1932年4月30日事業報告報告からは、フレッシュ・エア・キャンプが「青空の下のコドモの会へ」に組み入れられたと推測される。

¹³⁾ 社会事業団『第7期 自昭和八年五月一日至昭和九年四月三十日 収支決算表 事業報告』1頁。

¹⁴⁾ 社会事業団『第6期 自昭和七年五月一日至昭和八年四月三十日 収支決算表 事業報告』3頁。

II. おわりに：初期大型ホールのネットワーク形成実験

これまで観てきたように、そのネットワークは初め、『朝日新聞』の販売網を中心としたと考えられるが、そこから『週刊朝日』へ、さらに大正時代に入ってから好景気による読者層を得て（畠山1996：272）、コドモを媒介としたネットワークが徐々に拡張し、個々の枠組み内での活動が定例化されいったことが確認できる。

「コドモ・アテネ」が有するネットワークについて畠山は、その会費の内訳から、『アサヒ・コドモの会』の会員の一部が「アサヒ・コドモ・アテネ」の生徒になった¹⁵⁾。それ自体は正しいが、おそらくそれ以外に、保護者が「アサヒ・コーラス」の会員であったり、『会館芸術』の読者であったりした場合も考えられるだろう。

また、『コドモの本』を見ると、ホールでのそれ以外の活動、例えば大人を対象とした活動について言及することはほとんどない一方で、保護者に子供のための良書やレコードを提案¹⁶⁾したり、学校校長や専門分野を持つ教育者に執筆依頼¹⁷⁾したりといった、家庭教育への介入も強く意識した項目がある。朝日会館の大人を対象とした企画について掲載が無いのは、『コドモの本』の読者の保護者に『会館芸術』の購読者が一定程度含まれており、記事内容が重なることへの配慮もあったと考えられる。

つまり、「朝日会館」という実際の場所を中心としながら、『会館芸術』『コドモの本』『コドモの会』『アサヒ・コーラス』『コドモ・アテネ』といった、紙ベース・実体ベースの様々な関係性によって、広い世代間に渡って何重にも網を張り、ネットワークを強化・拡大していく方法がとられていたことがわかるのである。

先にも見たように、「社会事業団」の活動は1936年に発展的に解消されるが、財産処分の際しての決議において「〔社団法人朝日新聞社会事業団は〕社会的教化事業を行い一般国民の品性智識及情操の向上を図ると共に社会的救済事業を行い国民の福利を増進すること』」を目的として設立されたことが謳われている¹⁸⁾。

事実、その活動は、「朝日会館」という現実の場を中心に、地域の子育て支援員の組織化として「子供方面婦人委員」¹⁹⁾などの取り組みをはじめ、社会福祉に組み込まれた社会教育の実践が精力的に行われていくものであった。

また、社団法人の発展的解消時は、このような社会教育の目的と、山田耕筈を引っ張り出しての「音楽大衆講座」²⁰⁾にみられるような、芸術の大衆化の目的が同一線上に乗り始めていた時期でもある。芸術の大衆化への志向は、その後の労音の活動にもつながるものでもあり、戦後の芸術の大衆化路線、現代に通底する課題として、「朝日会館」の構築したネットワークが既に一定の実験結果を提供すると考えられる。

これらのネットワークの重なりが、家庭内にどのように浸透していったのか、そこでの雑誌の内容における影響や、社会的な感化について、さらに今後明確に実証・根拠づけるとともに、戦後の文化活動への影響について検証を今後の課題とするものである。

¹⁵⁾ 「会費「金1円」は「アサヒ・コドモの会、コドモの雑誌、徽章、楽器使用、歌曲その他の印刷物、通信費等」を含んでいた」（畠山1996, 236-238）

¹⁶⁾ たとえば、水上生「コドモのレコード」『コドモの本』（第2巻2号, 1932年4月号, pp.13-14）や、「よい本とごつし」『コドモの本』（第4巻11号, 1934年11月号, pp.13-14）など。

¹⁷⁾ たとえば、日本造形美術研究所所属の森下文一郎による「児童の解が教育について」『コドモの本』（第2巻1号, 1932年3月号, pp.15・8）や、大阪市北大江尋常小学校校長野隆義による「子供の眼!!!」『コドモの本』（第2巻2号, 1932年4月号, pp.10-12）など。

¹⁸⁾ 社団法人朝日新聞社会事業団『解散法人財産処分許可申請』昭和11年12月14日付

¹⁹⁾ 「台所口より妻女へのうち解けたる相談相手となるべき「子供方面婦人委員」の事業」（第6期1932年5月1日-1933年4月30日事業報告4頁）

²⁰⁾ 山田耕筈「朝日会館音楽大衆講座について」『会館芸術』1932年10月号, 通巻8号, p.15

引用・参考文献

コドモの本編集部『アサヒカイカン・コドモの本』大阪朝日会館内、アサヒ・コドモの会、社団法人朝日新聞社社会事業団。

- ・1932年3月号、第2巻第1号
- ・1932年4月号、第2巻第2号
- ・1932年3月号、第2巻第1号
- ・1932年8月号、第2巻第6号
- ・1933年1月号、第3巻第1号
- ・1934年3月号、第4巻3号
- ・1934年10月号、第4巻10号
- ・1935年9月号、第5巻9号

朝日会館・会館芸術研究会（編）、（復刻）『会館芸術』第1期・戦前編（1931年－1937年）、東京：ゆまに書房、2016年／2017年。

株式会社朝日新聞社、「社団法人朝日新聞社会事業団臨時社員総会会議事録」『社員総会決議録』、昭和3年3月1日付～昭和11年12月19日付。

朱通祥男編／永田哲朗監修『日本劇映画総目録 - 明治32年から昭和20年まで -』、東京：日外アソシエーツ株式会社、2008年。

十河巖「はなやかなフィナーレ——朝日会館 三十五年の幕を閉じる」『朝日人』昭和38年1月号、pp.35-38。

十河巖（著）、愛川潔（編）『朝日会館史（大阪朝日編年史別巻）』朝日新聞社史編修室、1976年。

畠山兆子「11章 大阪朝日新聞社における子どものための文化事業」津金沢聰廣編『近代日本のメディア・イベント』所収【271-298】同文館出版、1996年。

前島志保「解説」『会館芸術 第1巻 1931年（昭和6年）』所収【237-247】東京：ゆまに書房、2016年。